



イラン情勢で石油由来資材値上がり 県内1次産業にも打撃

ハウス栽培のボイラー、漁船燃料

品種変更、漁出られぬ可能性

中東ホルムズ海峡の事実上の封鎖が続き、県内の農林水産業にもコスト増の波が押し寄せている。ビニールハウスのボイラーや漁船の燃料に欠かせない重油をはじめ、石油由来の資材の値上がりなどで収益が圧迫されている。今後に必要な量を調達できるのかも不透明になり、生産者には「品種の変更も考えなくては」「漁に出られなくなるかも」との不安が募る。

今シーズンの出荷が始まった県特産のハウスミカン。毎年11月ごろから重油を使ってビニールハウス内を暖め、甘く、色づきよく育ていく。杵築市八坂のハウス内で作業に汗を流していた萩野

藍さん(28は約20坪で栽培する。重油価格は2月末に比べ2割近く値上がりして経営を直撃。「加温しないといけないミカンができないけど経費を考えるとあまり使いたくない」とつぶやく。



ハウスミカンを栽培する萩野藍さん。「早く収束してほしい」と願う。杵築市八坂

ファーマーズスクール修了後、就農して6年。愛情込めて育ててきた。今後は資材の高騰も見込まれ「これ以上、値上がりラッシュが続くならハウスミカンを休んで加温しない品種に変えることも視野に入れない」といけなくなる。



「今後、燃料が手に入りにくくなるのではないかと不安」と語る桑原保徳社長＝佐伯市鶴見沖松浦

らしてきた。「電気代もかさみ、楽に営農ができる状態ではない。厳しい」。既存の対策では追いつけない現状を語る。佐伯市鶴見沖松浦で巻き網漁業を営む「漁勢水産」の桑原保徳社長(56)は漁船の燃料として重油を年間約24万リットル使う。1リットルあたり十数円の価格変動でも長期化すれば100万円単位のコスト増になる。「漁に出て魚が取れなかつたら油がもったいない。確実な場所を狙うようにしている。この1カ月月には特に、油代がかかるように意識している」

ただ、最も恐れているのは重油が手に入らなくなる。こと。「このままの状況が続けば(購入に)数量規制がかかるのではないだろうか。漁に出られなくなる不安を口にす。

飲食業や畜産業を営む丸福(竹田市荻町)の工藤厚憲社長(67)は餌、軽油、農業用資材が軒並み値上がりしている現状を説明。「包装資材は早めに発注しているが確保できるか分からない。混乱が早く収まってくれないと今後の経営の予測が立てられない」と顔を曇らせた。

(池田美香)



〔問①〕記事の内容を整理し、現在の状況をまとめて、（ ）内に適切な文字を入れてください。

1.原因（国際情勢）：中東の（ ）海峡が事実上封鎖され、農林水産業にも影響が出ている。

2.影響（コスト増）：重油価格は今年の2月末に比べて（ ）近く上昇して、経営を圧迫している。

3.現場の対策（漁業）：佐伯市で（ ）漁業を営む漁勢水産は、「確実な場所を狙う」方法で燃料を節約している。

〔問②〕この記事では、「農業（ハウスミカン）」と「漁業」の事例が挙げられています。それぞれの分野において、コスト増に対してどのような「具体的な不安や懸念」が示されていますか。記事から読み取れる内容をそれぞれ簡潔に書いてください。

1.農業（ハウスミカン）

2.漁業

〔問③〕この記事を読まえて、大分県の農林水産業が、将来的にこうした国際情勢によるエネルギー価格の変動に左右されにくい産業になるためには、どのような対策が必要だと思いますか。あなたの考えを書いてください。